古文書勉強会

平成28年９月１７日

半田市立博物館

目次

1. 西成岩文書の構成
2. 本日の勉強会の概要
3. 皇女和宮降嫁と西成岩村
4. 長州征伐と西成岩村
5. 幕末の尾張藩通達書抜粋
6. 予備

西成岩文書の構成

- １戸口（宗門改帳、送り一札）　９１
- ２、３土地（検地帳、名寄帳、地租改正）　３３６
- ４年貢・諸役　２３７
- ５地下入費（三郷入費帳、諸勘定帳）６３
- ６法令（触留、布告）１０
- ７調達金（調達金、借上金）２４
- ８救（施米、御救金）７
- ９人足・助郷　２７
- １０土木・用水　１５
- １１村政　５２
- １２寺社　１１
- １３地図　２４　　総計９０７点

本日の勉強会の概要

西成岩文書には、幕末の事件と係りがある文書が残されている。

・皇女和宮降嫁に際して、人足として出ている記録

・禁門の変の情報伝達（通達）

・長州征伐に尾張慶勝の部隊に出征している記録

これらの文書をひもときます。

ついで、幕末の通達集（写し）より、幕末の様子をひもときます。

幕末の歴史（抜粋）

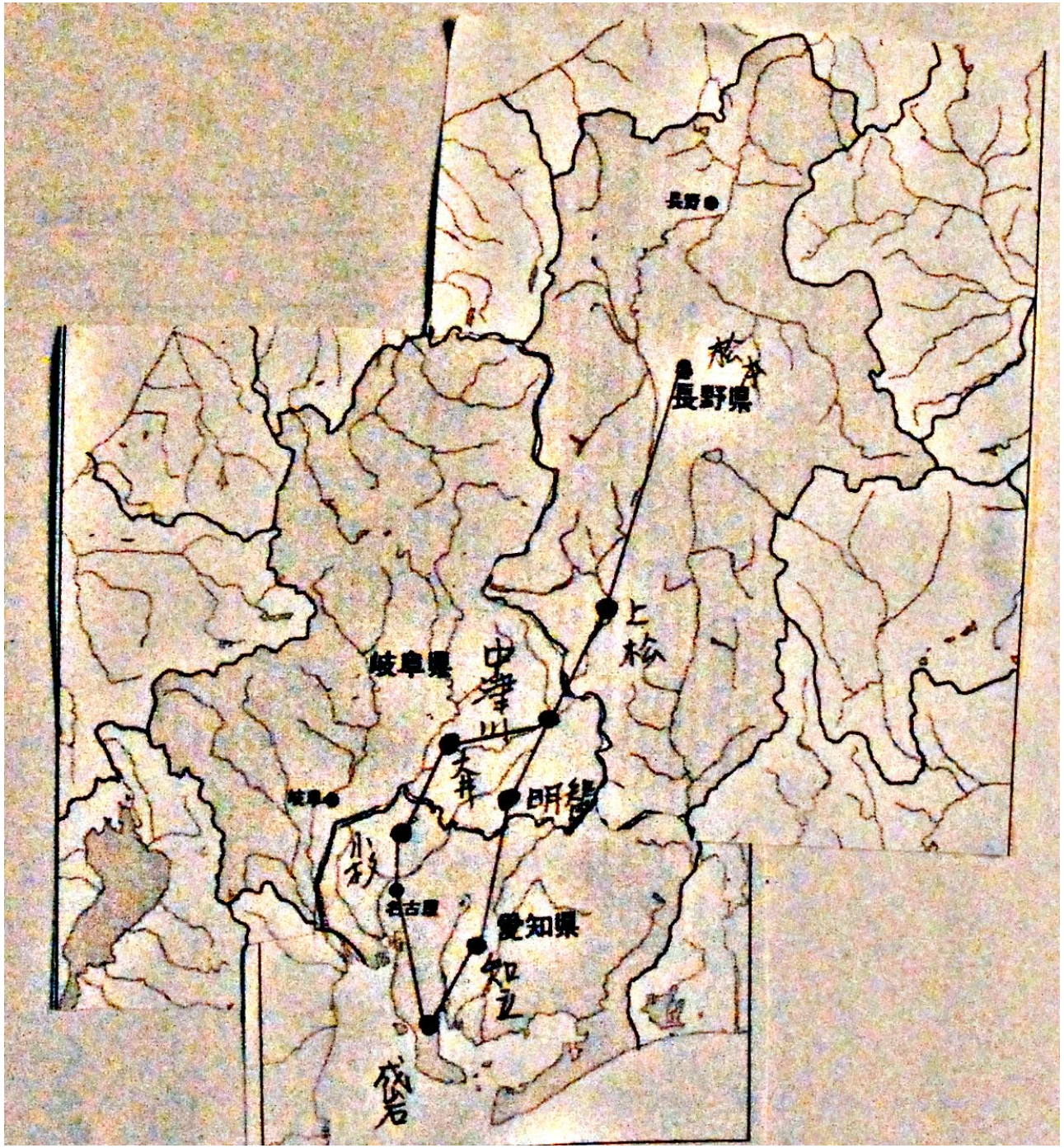
1853	嘉永６	ペリー艦隊を率いて浦賀に来航、アメリカ国書受領を要求、ロシア艦隊長崎に来航
1854	嘉永７	ペリー軍艦７隻を率いて浦賀に来航、日米和親条約を締結、イギリス艦隊長崎に来航、開国を要求
1858	安政５	日米修好通商条約に調印（無勅許調印）、朝廷無勅許調印を詰問、水戸藩に密勅を出す。
		徳川家茂将軍宣下なる。
		井伊大老安政の大獄、無勅許調印や対外政策を批判する連中を投獄、処刑。
		安政の大獄はかえって尊王攘夷運動の激化をまねいた。
1859	安政６	吉田松陰、橋本左内、頼三樹三郎死罪。
1860	安政７	井伊大老桜田門外で水戸藩士らによって暗殺
1860	万延元	幕府：公武合体をめざし、皇女和宮降嫁の斡旋を始め、孝明天皇皇女和宮降嫁を決定
1861	文久元	皇女和宮10月20日に京都出立、中仙道を通り11月15日江戸到着、付人千人
1862	文久２	2月11日皇女和宮、将軍家茂との婚儀挙行
		坂本龍馬土佐藩脱藩、真木泉久留米藩脱藩、長州藩久坂玄瑞・土佐藩中岡慎太郎など勤皇志士活動
		庄内藩郷士清川八郎の建議により浪士組結成、京都に進出
		東海道生麦村で薩摩藩士イギリス人４人を殺害（生麦事件）
1863	文久３	京都浪士組分裂し、近藤勇ら京都に残留し後の新選組が発足
1864	元治元	6月5日新選組池田屋の尊皇攘夷派志士を襲撃
		7月19日長州藩御所を攻撃（禁門の変）するが敗退、久坂玄瑞、真木泉ら首謀者自刃
		7月24日幕府長州藩追討を西日本３５藩に指示、元尾張藩主徳川慶勝追討軍総督となる。
		11月19日長州藩恭順し、家老ら切腹にて長州征伐終了
1866	慶応２	京都にて長州藩士桂小五郎、薩摩藩士西郷隆盛の薩長盟約を坂本龍馬斡旋
		7月20日将軍家茂死亡、12月5日第15代将軍慶喜宣下、長州戦争は休戦協定締結。
1867	慶応３	10月14日将軍慶喜大政奉還を朝廷に提出
		12月9日朝廷王政復古の号令を発す。明治維新なる。

西成岩文書　皇女和宮降嫁

辛　文久元年
和宮様中仙道御下向ニ付人足旁道具入用帳
酉十一月　成岩村
西村分扣

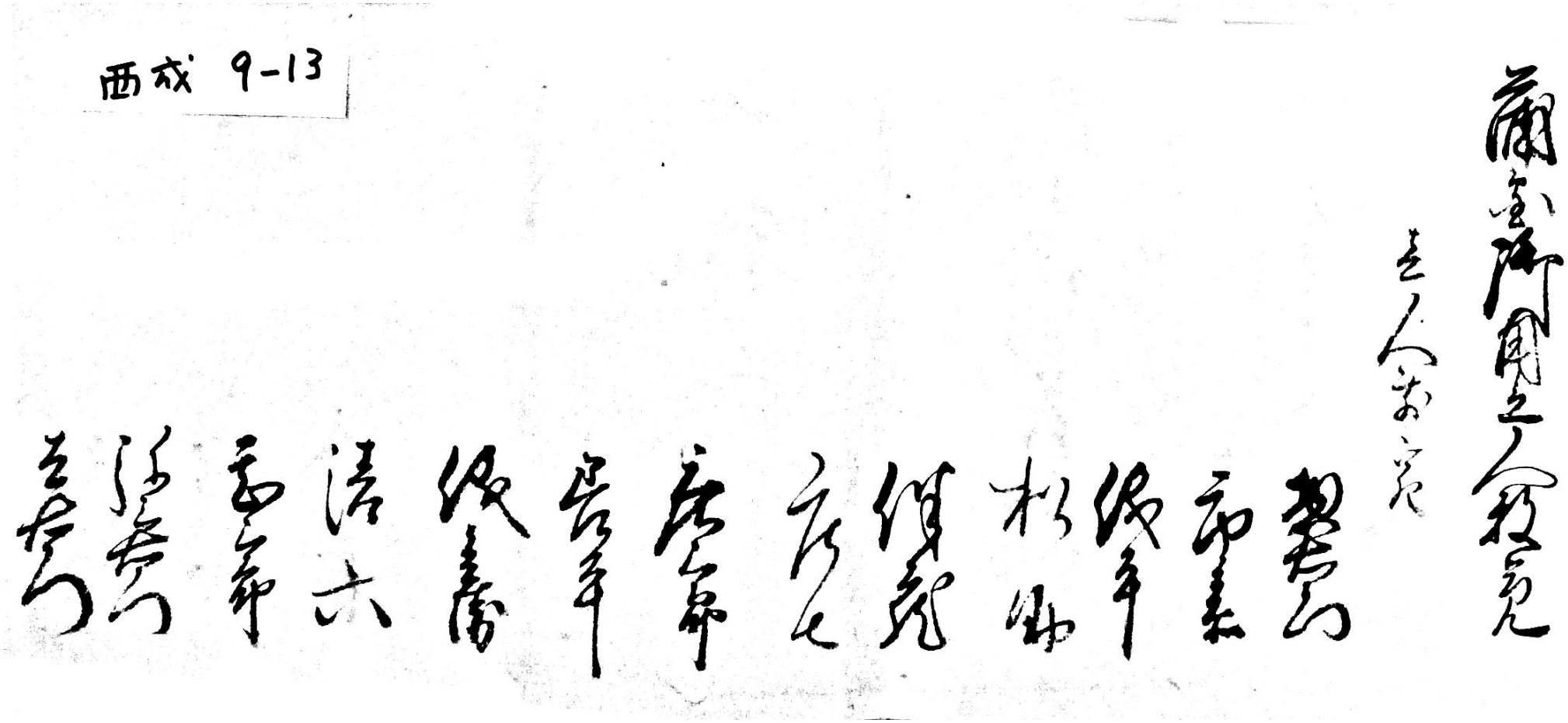
行程

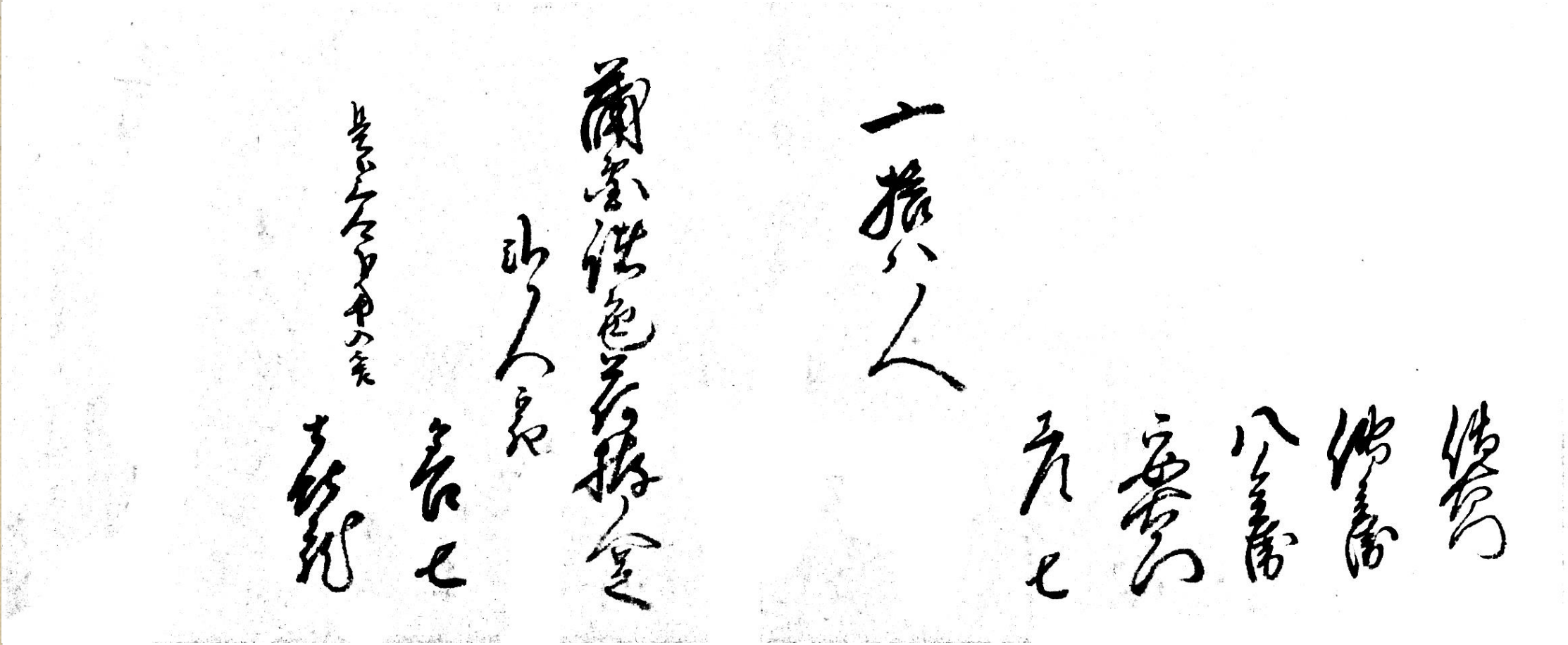
成岩の人々は、皇女和宮下向の人足として
２つのルートで、出かけている
一つは、成岩→名古屋→小牧→大井→中津川
一つは、成岩→知立→明智→中津川
（推定）中津川から松本までの間、人足として働いた

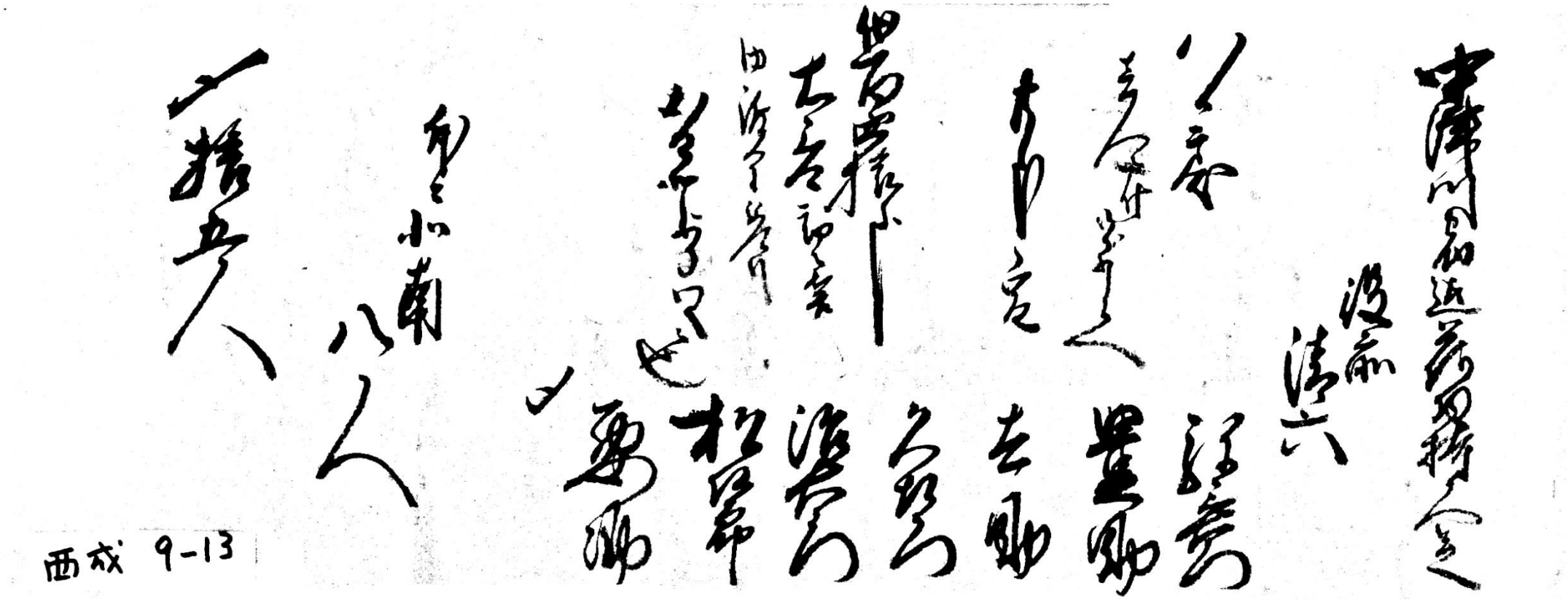


岐阜県　太田宿の和宮祭りの様子

西成 9-13



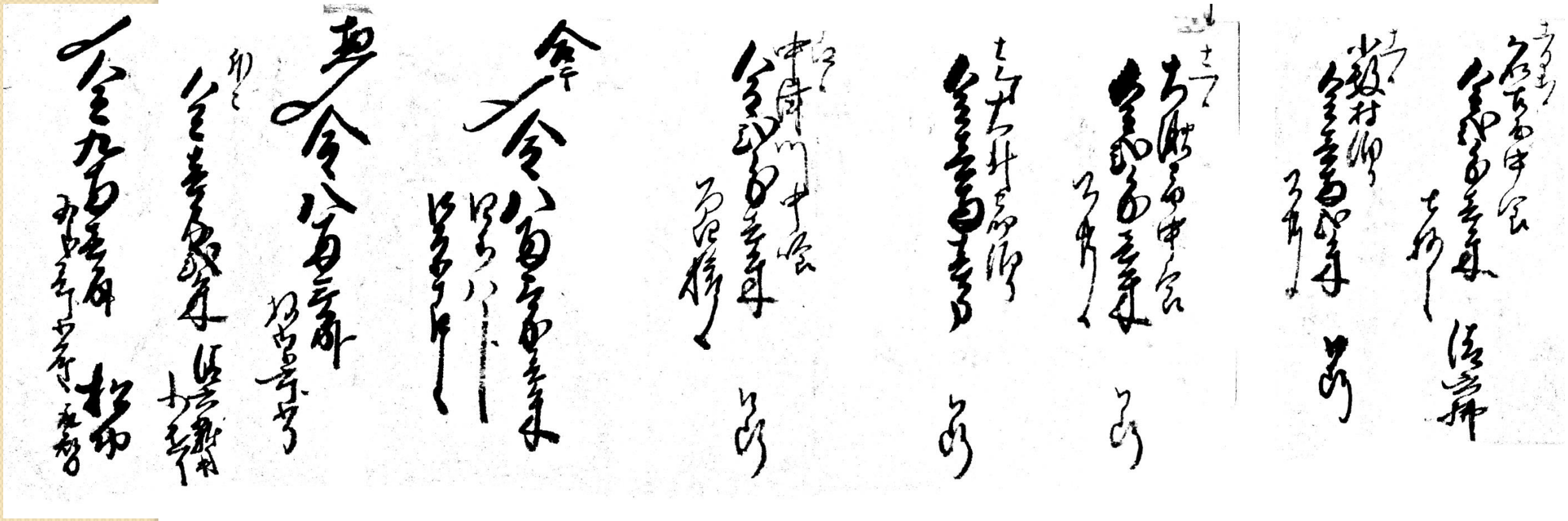




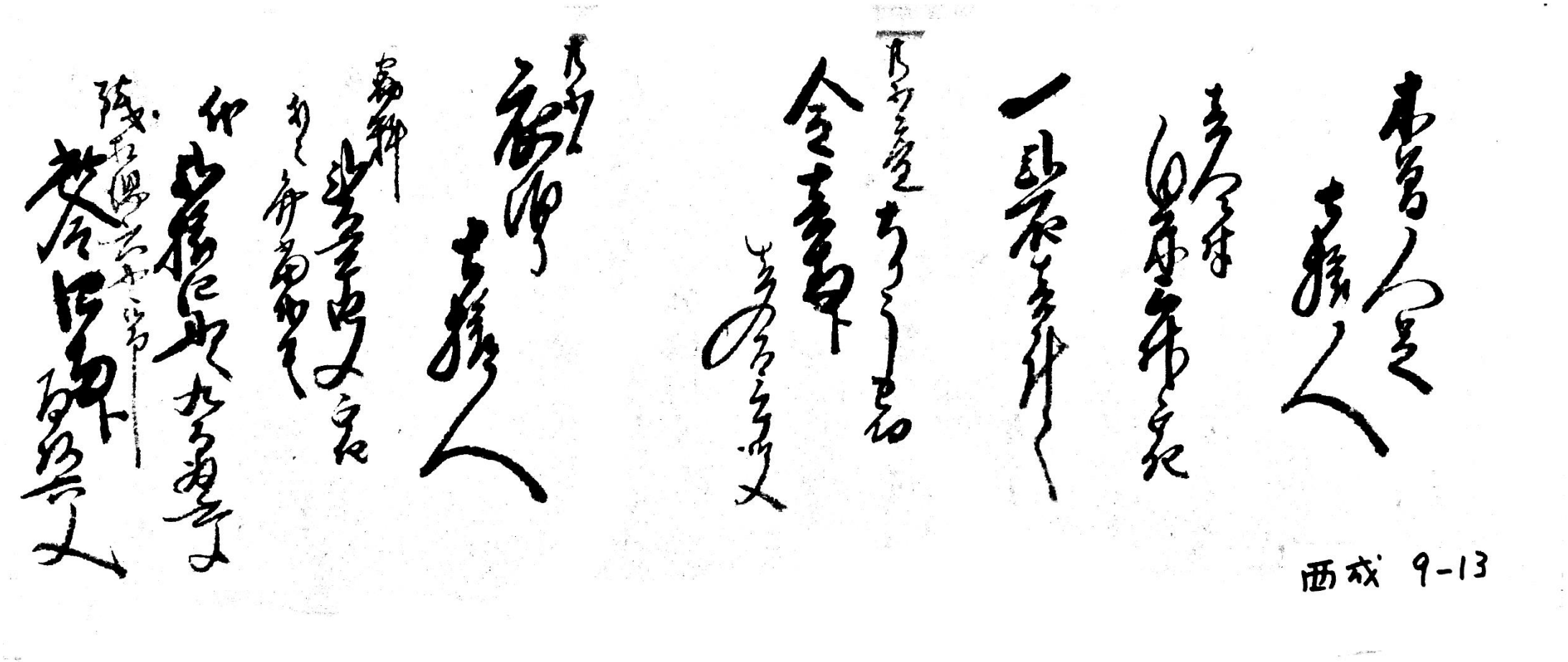
西成 9-13

蒲団御用立人数覚
壱人前宛
惣太郎
市兵衛
儀平
松助
伴蔵
庄七
庄三郎
善平
儀兵衛
清六
甚三郎
弥三右衛門
吉右衛門
傳右衛門
八兵衛
安右衛門
彦七
〆拾八人
蒲団諸色荷拵人足
弐人宛
善七
是ハ三郷下用入筈
喜蔵

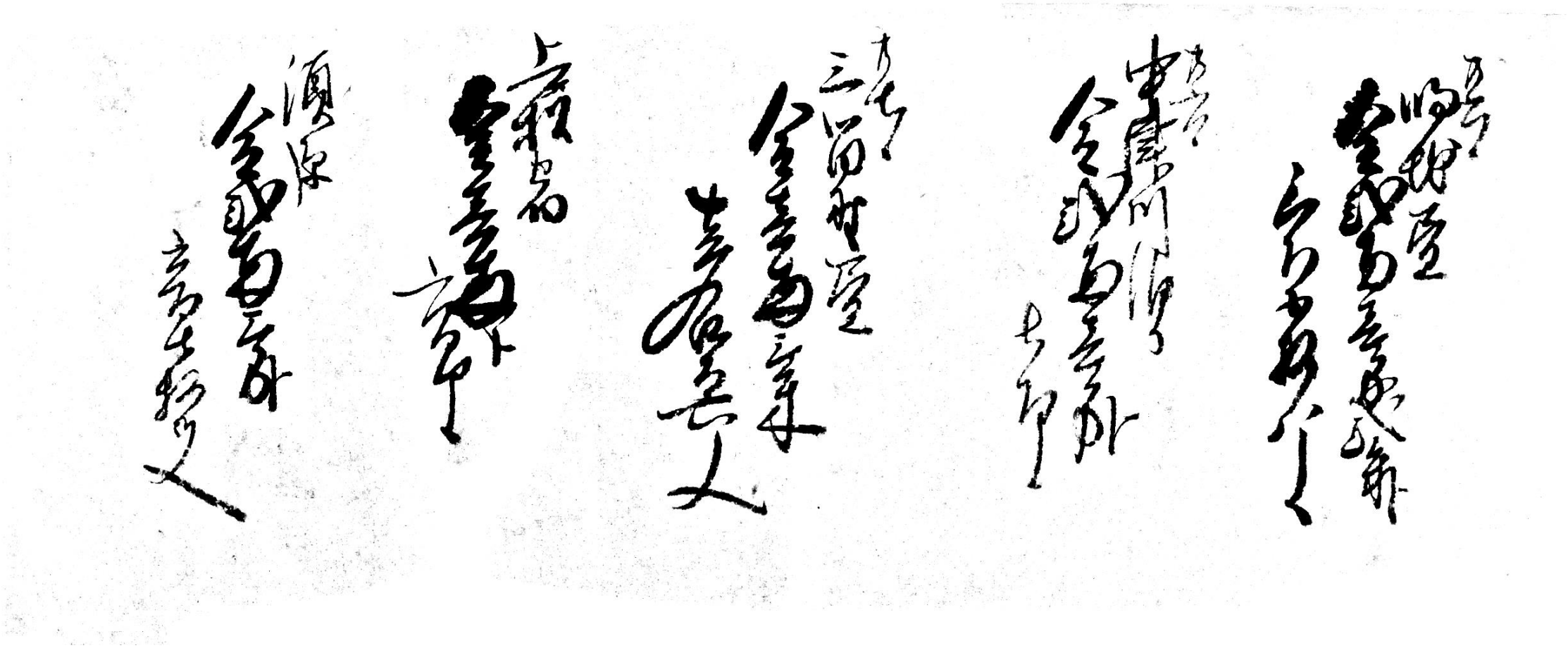
中津川宿返荷物持人足
役前
清六
弥三右衛門
豊助
太助
吉助久左衛門
治右衛門
松四郎
要助
八日戻
壱人二付　弐分五厘カヘ
廿日宛
代百四拾匁
右三郷勤之筈
内　渡金差引
八匁弐分四厘二也
〆
外二北南
八人
〆拾五人



十一月十一日
名古屋中食
金弐分壱朱　七拾文　清六拂
十一日
小牧村泊り
金壱両弐朱　百廿文　同断
十二日
大湫宿中食
金弐分壱朱　百廿文　同断
十三日
大井宿泊り
金壱両壱分　同断
十四日
中津川中喰
金弐分壱朱　百四拾文　同断
合テ
〆金八両三分壱朱
四匁八分
四百五十四文
惣〆　金八両三分ト
拾弐匁六分五厘
外二
金壱分弐朱　清六　雑用
小遣イ
〆金九両壱分ト
五匁壱分五厘　松助
取替



西成 9-13



木曾人足
七拾人
壱人二付
白米三升宛
〆弐石壱斗也
廿五日昼　ちりう宿
金壱両ト
壱〆百三十弐文
廿五日
夜泊り
七拾人
宿料
弐百六十四文宛
外二　弁当代も
代　弐拾四貫九百拾六文
銭相場六貫弐百
此金　四両ト
百拾六文

廿六日
明地昼
金弐両壱分弐朱ト
三百五拾八文
廿六日
中津川泊り
金弐両壱分ト
七百文
廿七日
三留野昼
金壱両三朱
壱〆四百六文
上松宿
金壱両ト
六百四文
須原
金弐両三分ト
六百七拾弐文

まとめ

第一団　七十人
旅程
十一月十一日小牧村泊り
十一月十二日大湫宿泊り（中仙道宿場）
十一月十三日大井宿泊り（〃）
十一月十四日中津川昼食
旅費〆　九両壱分ト五匁壱分五厘
（九十一万円ほど）
人足賃：木曾人足（中津川あたりの夫役）
一人米三升、二石一斗

第二団　七十人
旅程
十一月廿五日ちりう宿（泊り）
十一月廿六日明地（智）昼食
十一月廿六日中津川泊り
十一月廿七日三留野経由上松泊り
以降月日不明　須原（泊りか）
同　吉野（松本付近、泊りか）
同　前野村（泊りか：筆者注）
同　酒本　宿
同　中津川宿
同　生田（泊りか）
同　大曽根経由宮宿
合計十三日、
旅費　四十九両余（５００万円ほど）
外に馬一疋　三両余

第三団
大湫宿詰六人　代金六両余

第四団
中津川行　釜諸道具人足
代金　壱両余

第五団
蒲団荷送り　代金一両余
蒲団代を含め　百八両余

第六団

上松宿人足（に出かける）七十人

十一月廿五日　ちりう宿

十一月廿六日　明地（智）宿

十一月廿七日　中津川宿

十一月廿八日　三留野（泊りか）

月日不明　上ケ松（泊りか）

月日不明　須原（泊りか）

月日不明　吉野（泊りか）

月日不明　前野村（泊りか）

月日不明　須原（泊りか）

月日不明　中津川（泊りか）

月日不明　生田（泊りか）

月日不明　大曽根（泊りか）

月日不明　名古屋宮（泊りか）

月日不明　笠寺（昼食か）

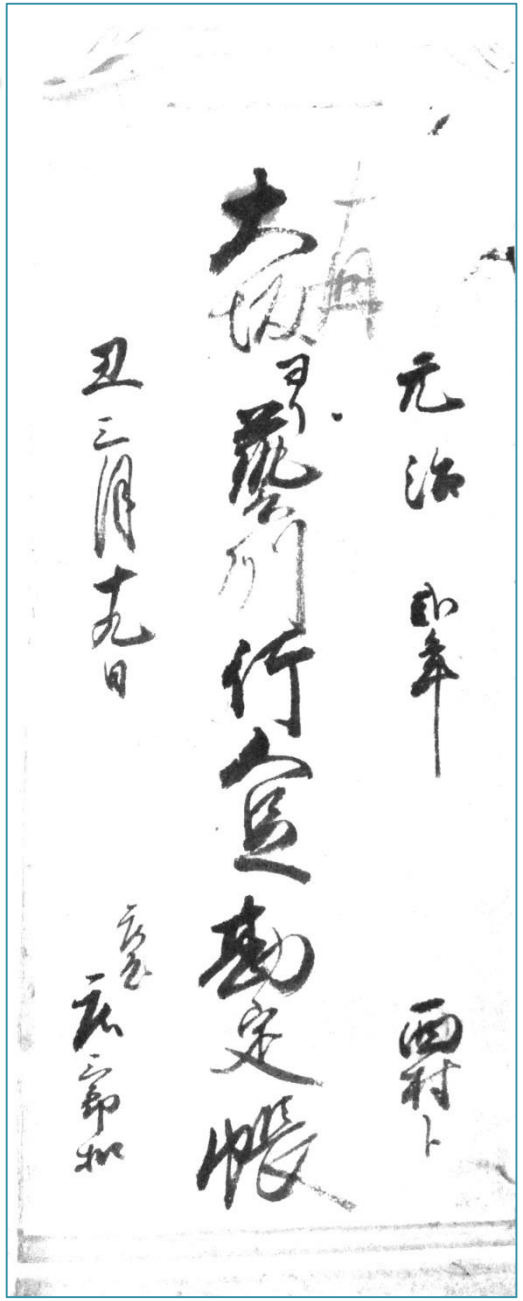
人足賃　十五両余

旅費〆六十四両余

結局第一団～第六団まで、

二百四十二両（二千四百万円）出費

長州征伐と西成岩



元治弐年　西村分
大坂より芸州行人足勘定帳
丑三月十九日
庄屋　庄三郎扣

西洋式軍装に身を包んだ幕府軍

西洋式軍装に身を包んだ幕府軍

まとめ

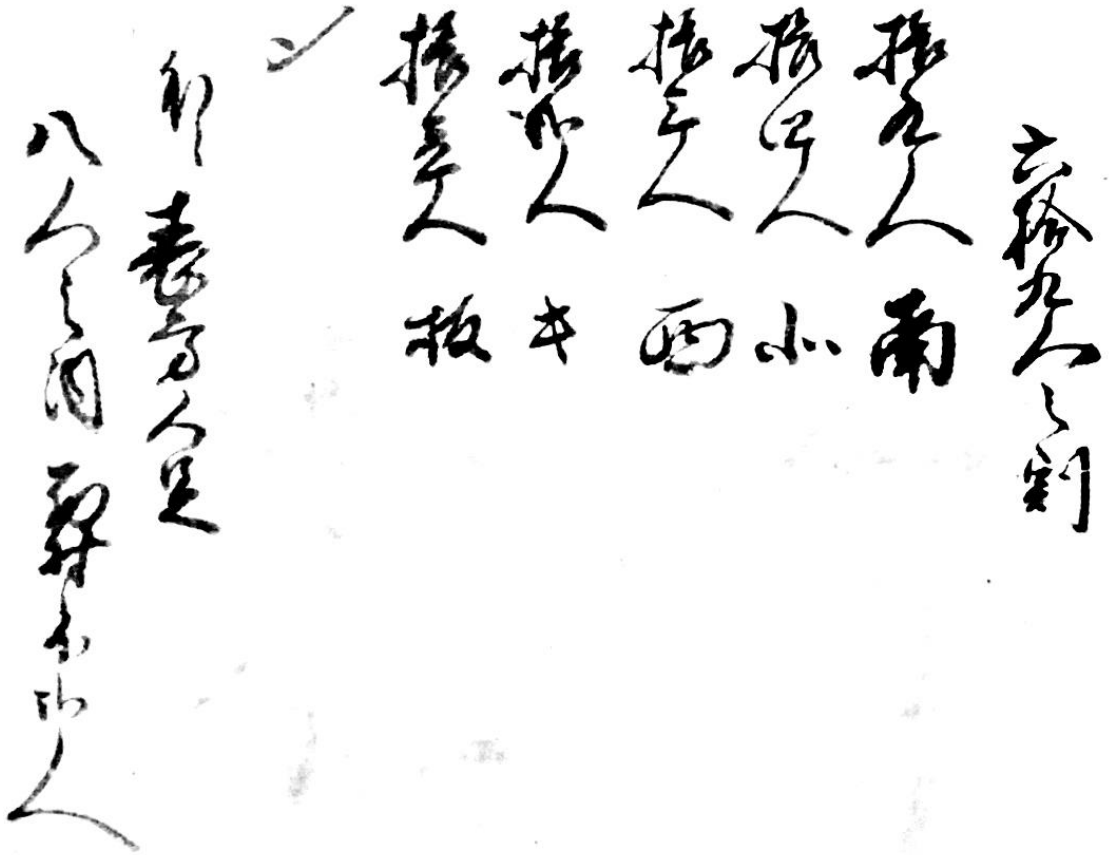
人足内容	帰郷日	人足人数	稼働日数	人足費	注
夫人足と表人足	子（元治元年）12月晦日	2	72	7両1分ト９匁	
草人足	子12月晦日	13	71	92両１分ト３匁	途中までの費用
歩人足	丑1月21日	8	92	16両3分ト1匁	晦日から追加費用
歩人足	丑1月28日	1	99	2両3分ト3匁	晦日から追加費用
歩人足	丑2月10日	2	109	6両ト12匁	晦日から追加費用
歩人足	丑3月6日	2	134	13両	晦日から追加費用
合計				148両1分ト1３匁	

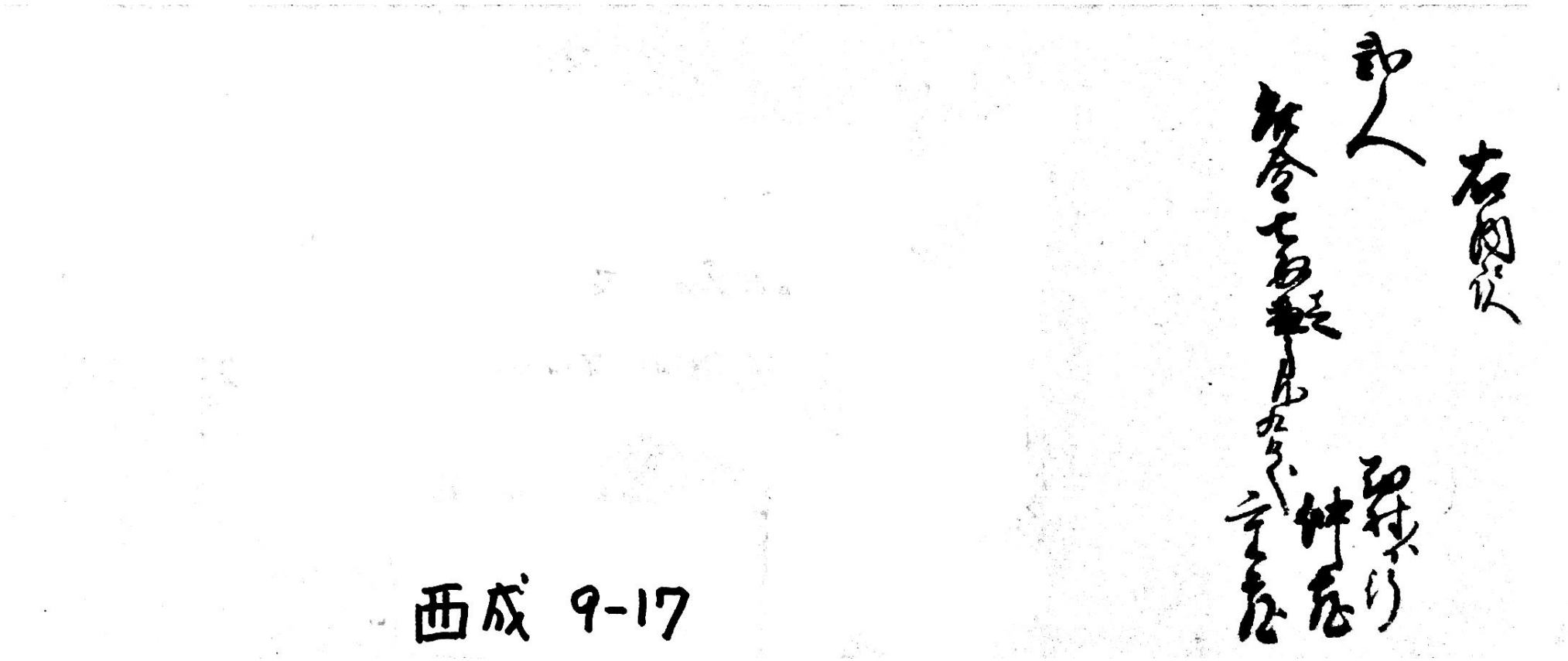
資料を読み取ると、西成岩の人々は、帰郷日から逆算し、尾張慶勝が長州征伐*総督*を受けてから、8日後の元治元年10月13日に芸州（広島県）に向けて出発した。
原文に出兵と記されていないが、歴史的には出兵である。

そして、解兵（終戦）の元治元年十二月廿七日前後に役を解かれて、追々帰村するのである。

尾張藩の記録では、尾張慶勝の名古屋出発日は、９月14日、
長州戦争終了日が、12月27日、帰国は、翌元治２年3月29日であり、
西成岩の人々は、戦争が終わるとすぐに帰村した人、尾張慶勝が帰京するまでつき従っていた人がいたということである。

西成岩文書



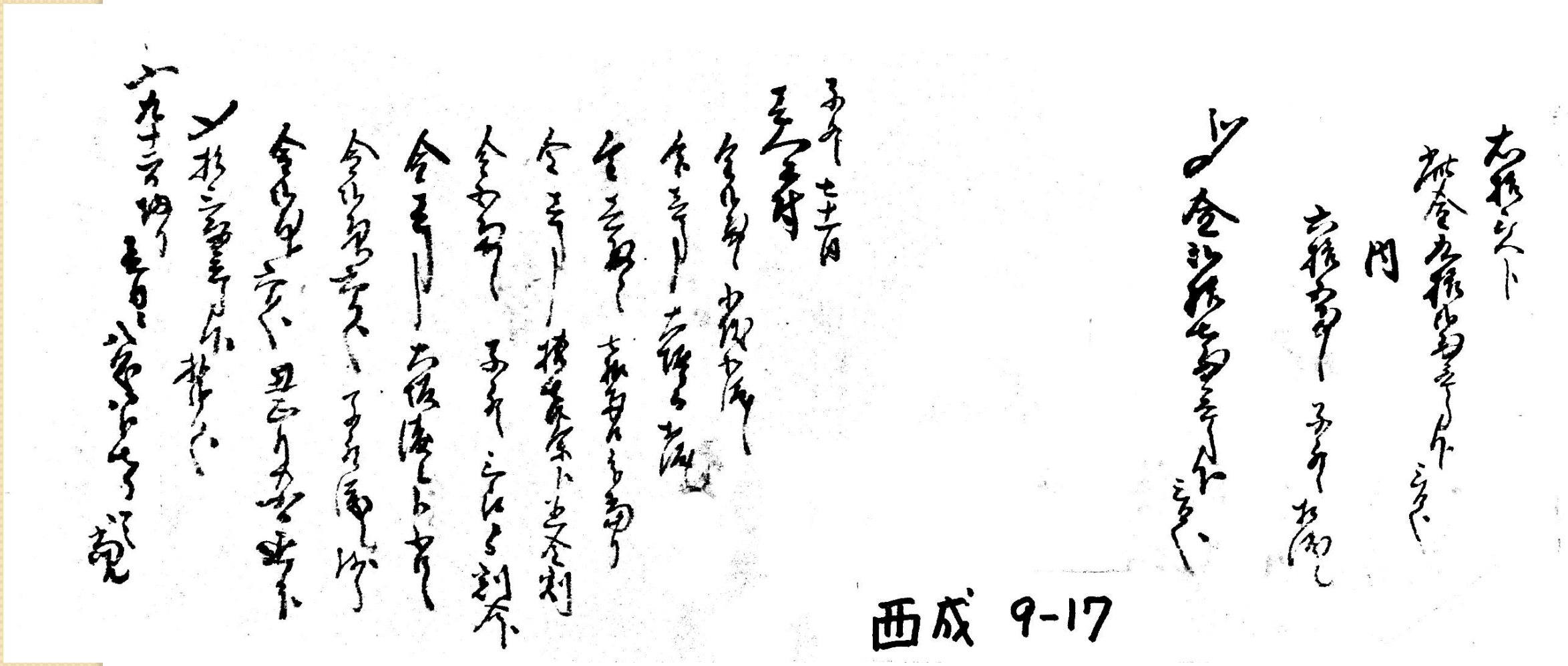


西成 9-17

六拾九人之割
拾九人　南
拾四人　北
拾三人　西
拾弐人　キ
拾壱人　板
〆
外ニ表方人足
八人之内　西村ヨリ弐人

三郷ニ而
八人　表人足
子暮　大晦日帰リ
出入七拾弐日返リ
但シ壱日六匁ツヽ割
壱人ニ付
金七両ト拾弐匁
此金五拾七両弐分ト　六匁
内
金四拾両也　相渡候
引〆　金拾七両弐分ト　六匁
但シ壱人ニ付
金弐両ト拾弐匁　子冬
渡候残リ
外ニ金壱両弐分　小使相渡候
引〆　金三両弐分ト　拾弐匁
ツヽ
右内訳

弐人　西村ヨリ行
此金七両壱分九匁　仲蔵
重蔵



西成 9-17

三郷二而
六拾九人　草人足
壱人ニ付金七両ト六匁ツヽ子冬
五両ツヽ相渡候
引テ金弐両ト六匁宛
但し子十二月迄出入七十一日返リ
此金
合テ百四拾四両三分　九匁
内訳
西村分　拾三人
改名　徳三郎　五郎左衛門
与七
安　徳右衛門　利兵衛
平三郎　助蔵
四郎兵衛
文四郎
松三郎　重兵衛
清助
武助
孫四郎　岩七
平助
徳左衛門
小左衛門
〆

右拾三人分
此金　九拾弐両壱分ト三匁
内
六拾五両　子冬相渡シ
引〆　金弐拾七両壱分ト三匁

子冬　七十一日
壱人二付
金弐両　小使相渡シ
金壱分　大坂ニ而相渡シ
金壱両　七拾両江口当リ
金壱分　口七口三朱分返金割
金五両　子冬　三節ニ而割合分
金壱分　大坂渡シ分　不足
金弐両ト六匁　子相渡シ残リ
金弐両ト六匁　丑正月廿五日返分
〆拾三両壱分ト拾弐匁
〆九十二日帰リ
壱日ニ八匁八分七厘ツヽ当ル

丑正月廿一日返リ
弐拾八人　歩人足
壱人二付
合弐両ト六匁ツヽ
此〆金五拾八両三分ト三匁
内
西村ヨリ八人
与七
助蔵
清助
武助
岩七
平助
徳左衛門
小左衛門
此〆金拾六両三分ト壱匁

長州征伐　元治元年

前大納言様御西征一条書より

前大納言様御西征

元治元年甲子九月十四日尾州御立（浅野長勇旅行）

同月廿一日　御京着

十月十五日　御一ヶ月

十月朔日　大坂御立

同月十六日　芸州廣島御着陣

同二年正月四日　同ニ御陣拂　御立

同月十六日　大坂御着（廿三日迄御滞留）

同月廿四日　京都ヲ御着

三月廿六日　京都御立（伊勢路四日滞在）

同月十九日　御着城

御休泊割

十四日　御泊　御泊

十五日　稲葉　加

十六日（十七日）　黒田　大垣（十六日御昼食）

十七日（十八日）　高倉本　梅原

十八日（十九日）　武佐宿　愛知川

十九日（二十日）　草津　守山

廿日（廿一日）　御着座　大津

朝出御小休所　清須　西枝村　長松村　高宮　山田村　多賀川　山科　瀬上

夕出ヲ断　萩原　南宿村　今須　関ヶ原　番場

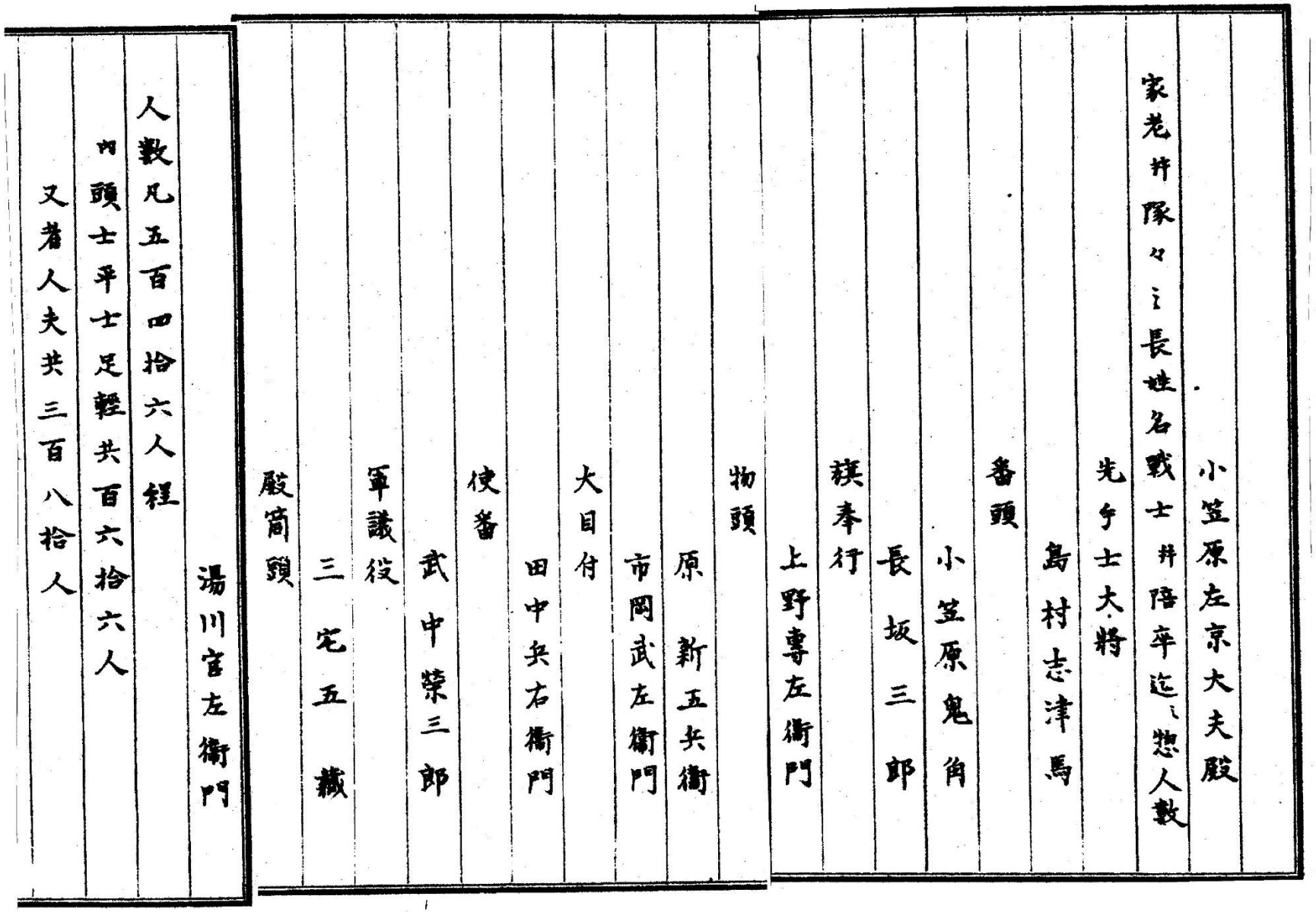
前大納言様御西征
元治元年甲子九月十四日尾州御立　美濃路七日振

御旅行
同月廿一日　御京着
十月十五日　御下阪
十一月朔日　大阪御立
同月十六日　芸州広島　御着陣
同二年正月四日　同所御陣払　御立
同月十六日　大阪御着廿三日迄滞留
同月廿四日　京都江御着
三月廿六日　京都御立　伊勢路四日振
御旅行
同月廿九日　御着城

御休泊割
十四日　御昼　御泊
十五日　稲葉　起
十六日　黒股　大垣十六日御
逗留
十七日　関草
十七日　
十八日　鳥居本　柏原
十八日　
十九日　武佐宿　愛知川
十九日　
二十日　草津　守山
廿日　
廿一日　御着宿　大津

朝出御小休廻り
高宮　清須　西結村　長松村　垂井
瀧上　山本　鳥居川　山科
夕出同断
番場　荻原　南岩村　今渡　醒ヶ井
麿科峠　日境

長州征伐　諸藩人数名列



征長諸藩人数名列より

征長諸藩人數名列

小笠原左京大夫殿

家老并隊々ニ長姓名戰士并陪卒迄ニ惣人數

先手士大將

島村志津馬

番頭

小笠原鬼角

長坂三郎

旗奉行

上野專左衛門

物頭

原新五兵衛

市岡武左衛門

大目付

田中兵右衛門

使番

武中榮三郎

軍議役

三宅五藏

殿筒頭

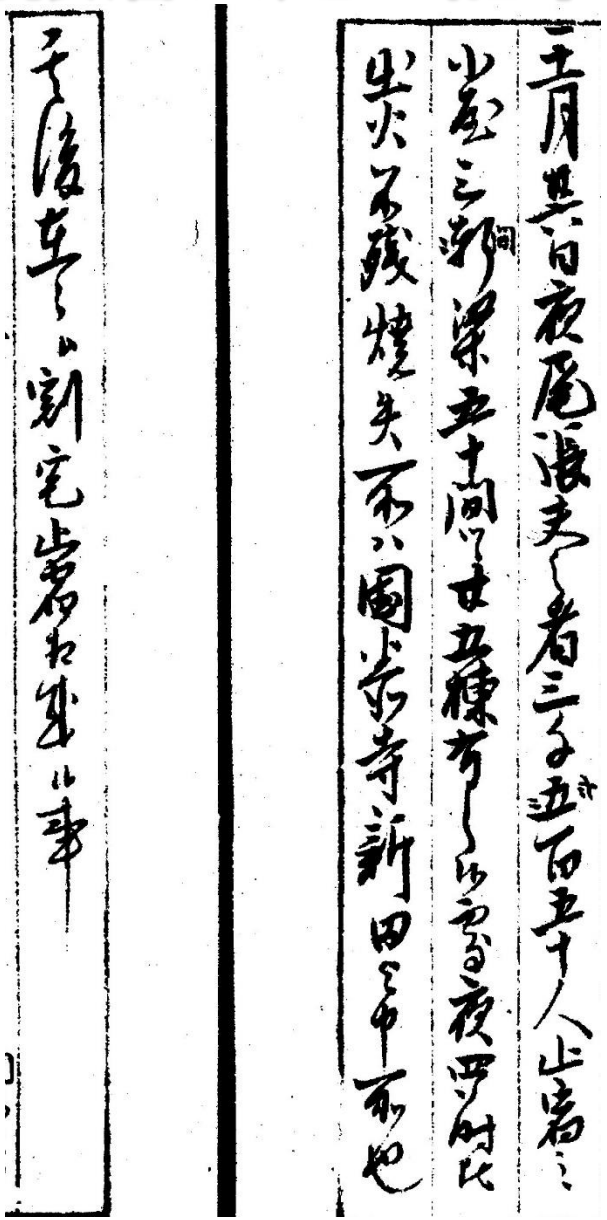
湯川宮左衛門

人數凡五百四拾六人程

内頭士平士足輕共百六拾六人

又者人夫共三百八拾人

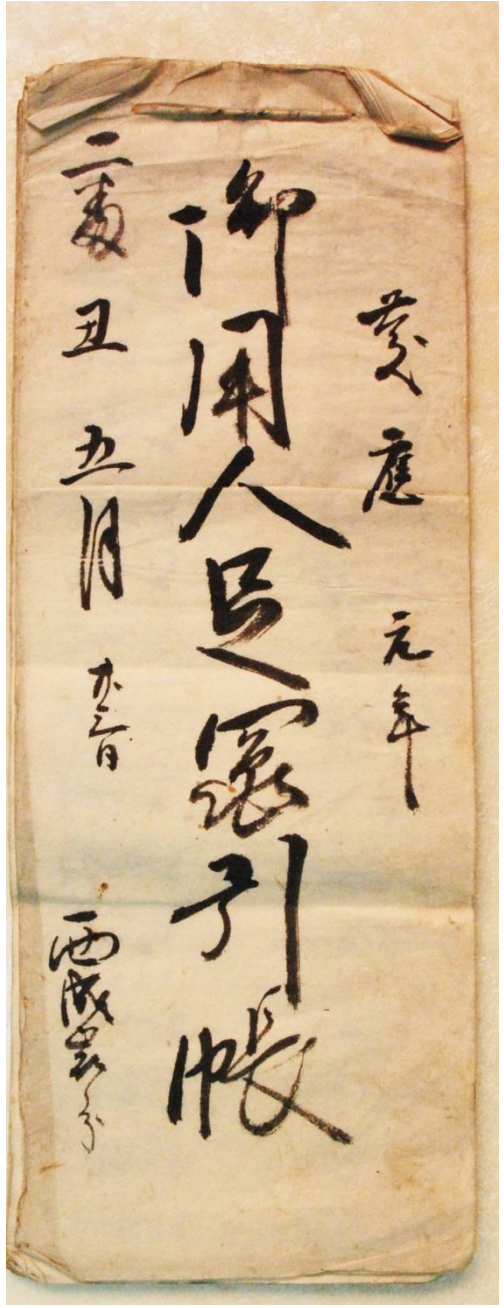
長州征伐　尾張藩人足の記事



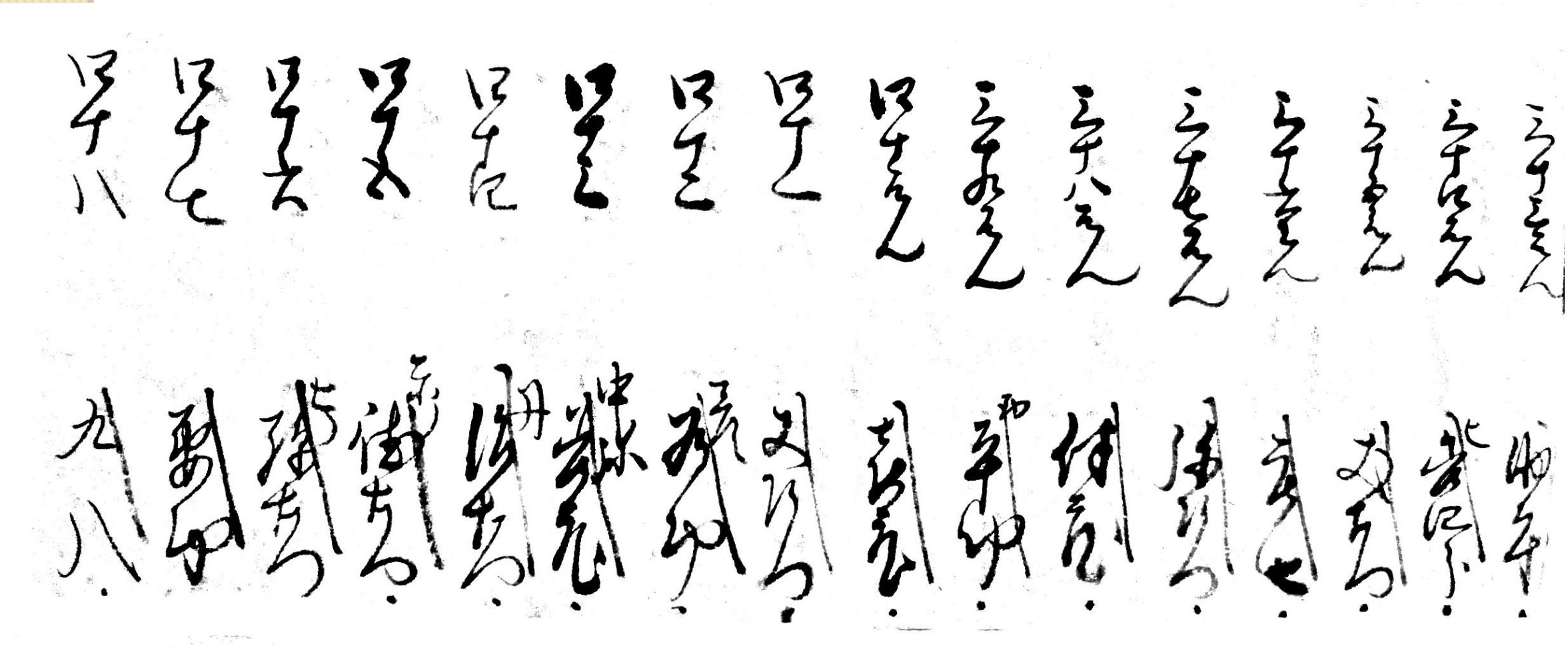
前大納言様御西征一条書より

一十一月廿六日夜尾張夫之者三千五百五十人止宿之
小屋三間梁五十間ツツ廿五棟有之候處夜四ツ頃
出火不残消失所ハ国小前寺新田ト申所也
其後在二ハ割宅止宿相成候事

御用人足賃引帳



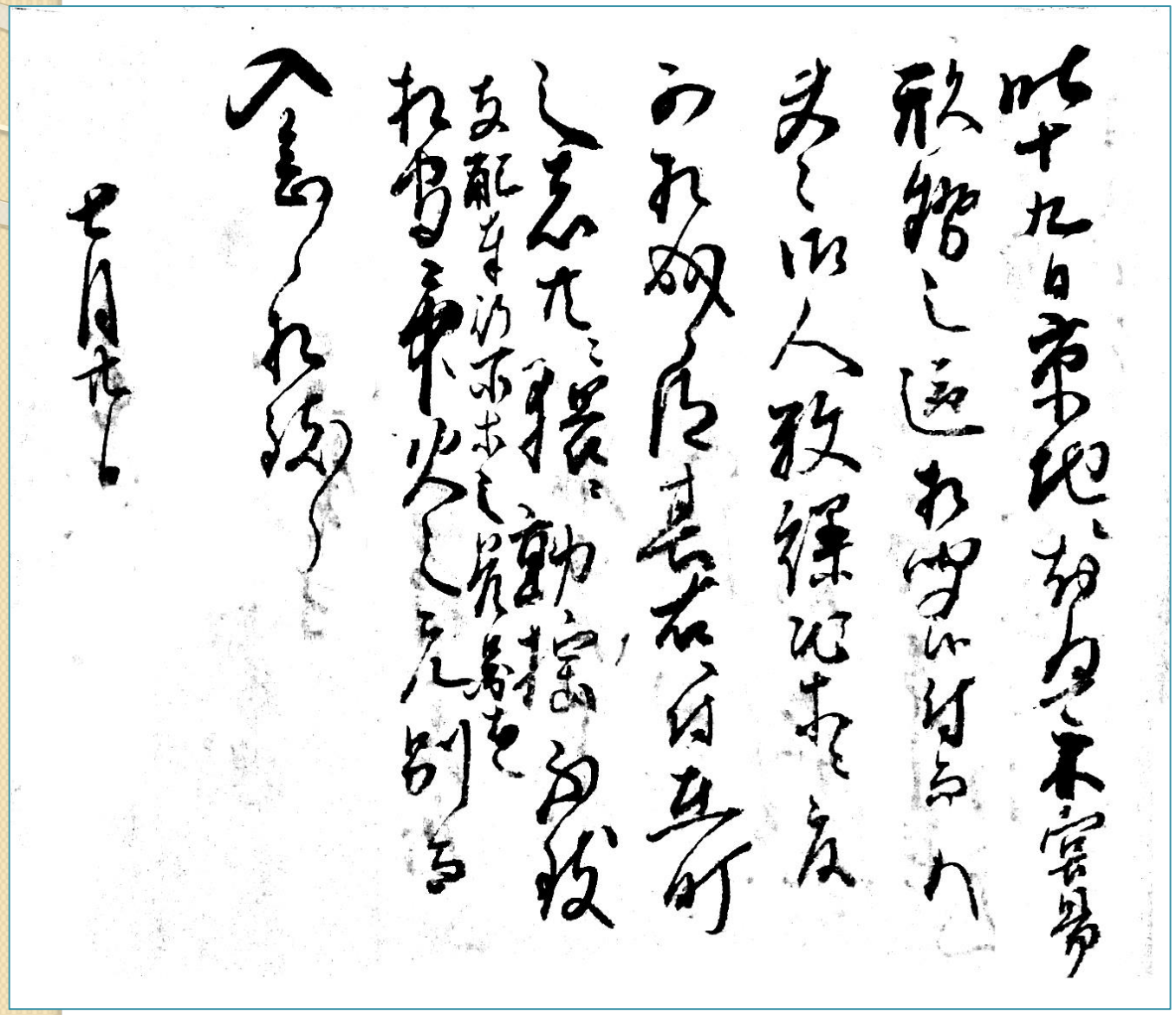
御用人足闘引帳



三十三者（は）ん　助平
三十四者ん　ヒ善四郎
三十五者ん　丈右衛門
三十六者ん　庄七
三十七者ん　弥左衛門
三十八者ん　伴蔵
三十九者ん　西平助
四十者ん　喜蔵
四十一　又左衛門
四十二　彦　為助
四十三　中弥　善蔵
四十四　丹　治右衛門
四十五　東ノ　徳右衛門
四十六　七ノ　孫右衛門
四十七　要助
四十八　九八

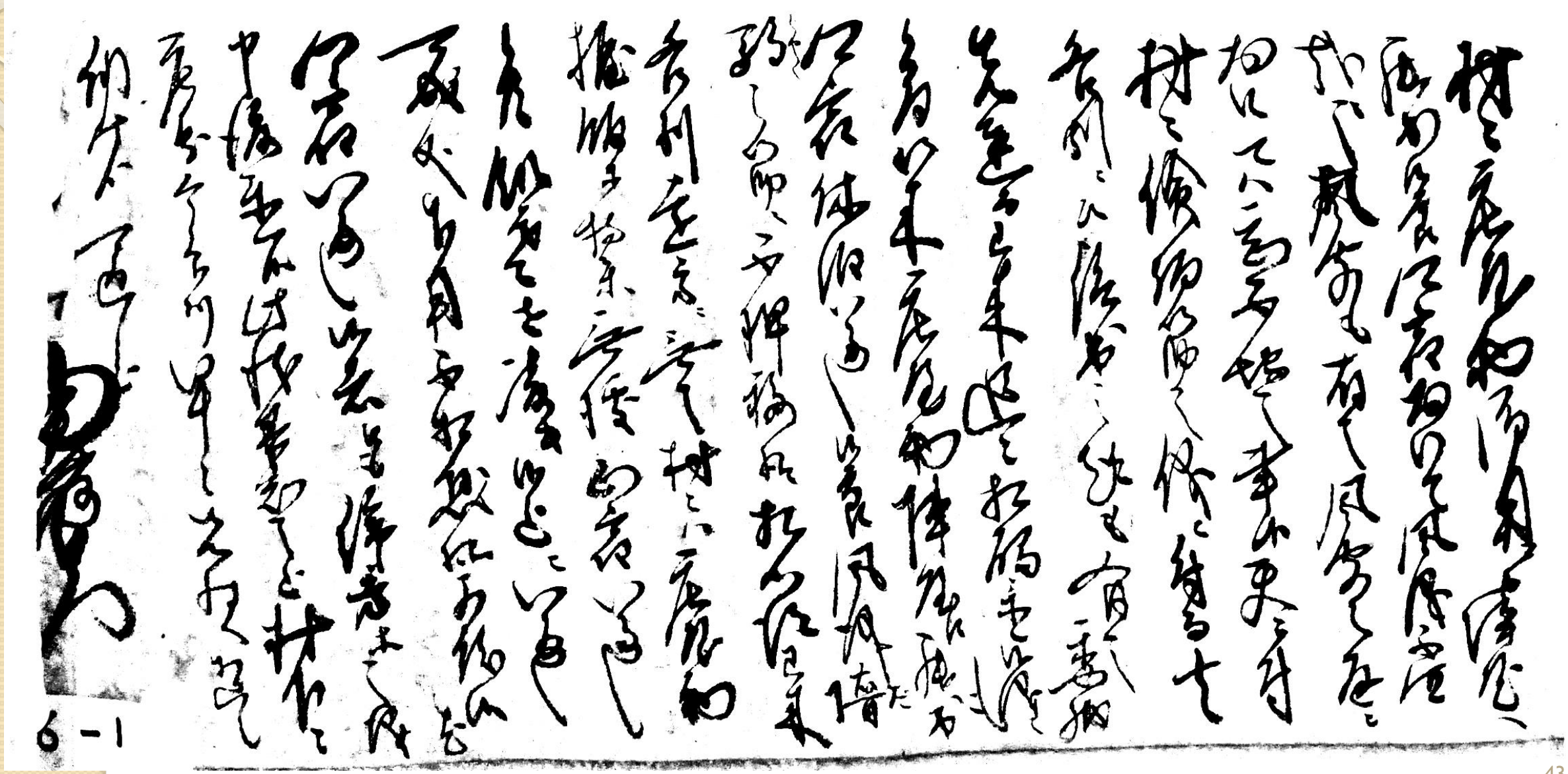
皇女和宮下向、長州征伐以外に、将軍の上洛、公家の下向、藩主の移動などさまざまな機会に、人足としてかりだされるため、偏りがないように、不公平がないように、鬮で出る人を決めていたのか。西成岩全員の１５８名（家族）に番号をつけ、鬮引きしたと思われる。

通達文例：禁門の変の情報伝達



昨十九日京地ニ於為て不容易
形勢之趣相聞候付而ハ
夫々御人数繰出等ニ度
可相成り候其右ニ付在町
之者共ニ猥ニ動揺不致
支配奉行所等之差図を
相守候中火之元別而
入念候相致し候
七月廿日

通達文例　節約令

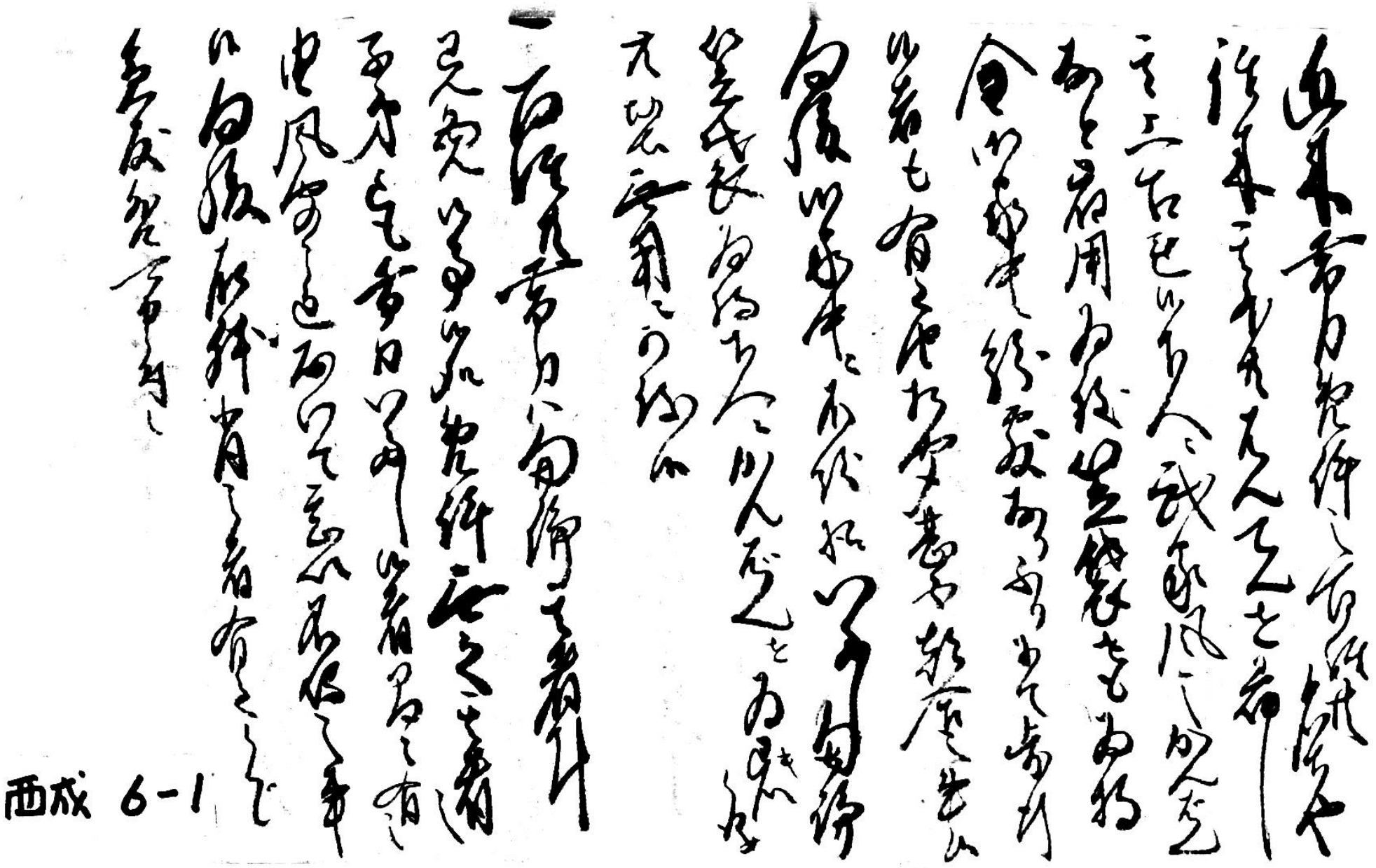


6-1

天保１２年Ｚ０６５

村々庄屋於御用ニ而陣屋へ
罷出候節郷宿おいて風儀不宜
哉之風聞も有之風聞之通ニ
おいてハ甚不埒之事候夫ニ付
村々倹約筋之儀ニ付而者
格別ニ被仰出之趣も有之委細
先達而已来追々相触置候儀ニも
候間以来庄屋初陣屋江罷出
郷宿休泊い多し候節風儀惰
弱之筋ニ不捍福（感服）様相心得已来
各（格）別遠方ニ無之村ニハ庄屋於
握飯等持参無據止宿い多し
候共飢寒を凌キ候迄ニい多し
可成丈下用不相懸様可致候尤
郷宿い多し候者江も締方等之儀
申渡置候此状承知之上村下ニ
庄屋令印刻早々先村へ相廻し
納村ヨリ可返候　以上
九月十二日　奥藤左衛門

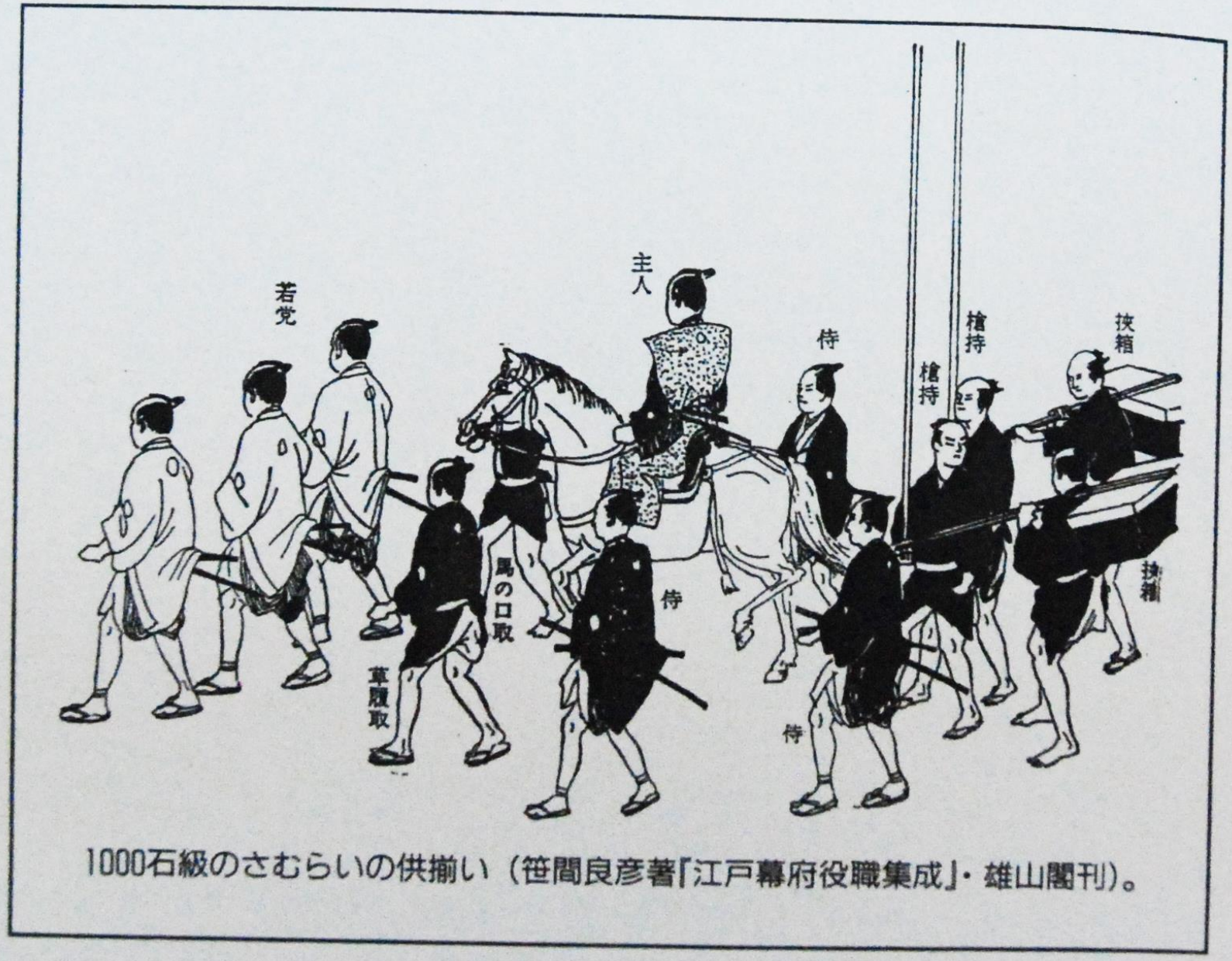
通達文例　禁止令



西成 6-1

かんばん

武士は、若党、中間を連れて外出する。中間ははんてんに家紋を大きく染めていて、これを「かんばん」と称した。

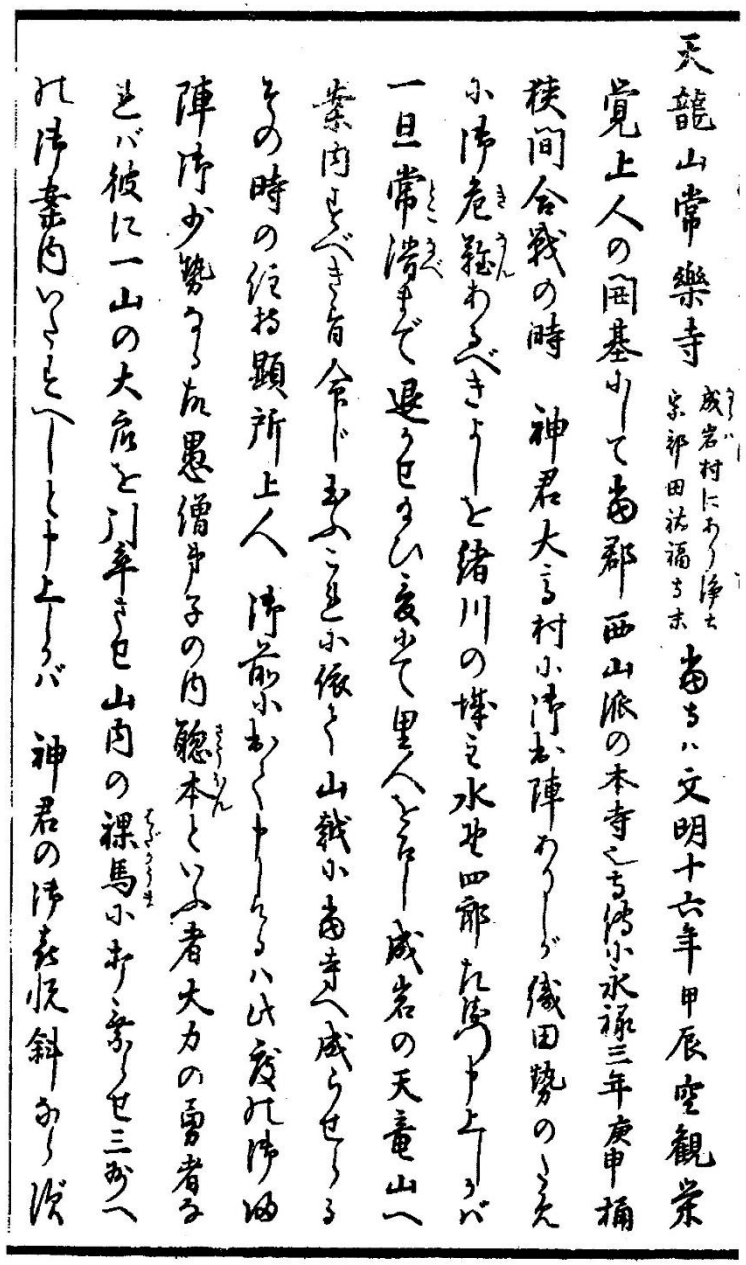


1000石級のさむらいの供揃い（笹間良彦著『江戸幕府役職集成』・雄山閣刊）。

天保１２年資料６の１

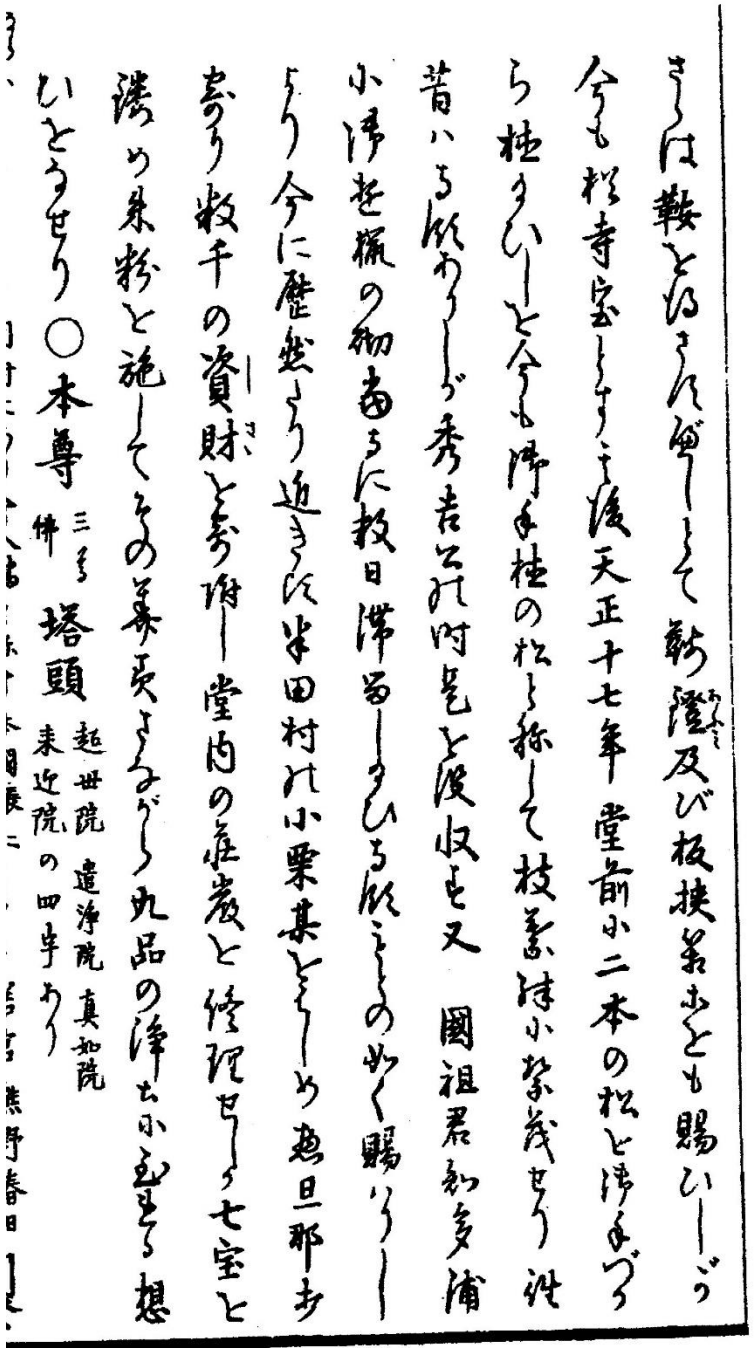
近来帯刀免許之百姓共名古屋
往来其外とも者んてんを着し
其上召連候下人ニ武家風之かんばん
なと着用為致笠袋をも為持
全御家中紛敷なりふり尓て歩行
候者も有之由相聞甚不都合之事候
向後御家中ニ不紛様い多し勿論
笠袋為持下人ニかんばんを為着候儀
共堅無用ニ可致候
一百姓共帯刀ハ勿論其者計
差免候事候処免許無之其者之
子弟とも帯同い多し候者間々有之
由風聞之通於いて甚以不埒
之事候向後右躰背之者有之候ハバ
急度咎可申付候

尾張名所図会
成岩常楽寺の記



天竜山常楽寺成岩村にあり浄土宗都田祐福寺末
当寺ハ文明十六年甲辰空観栄
覚上人の開基にして当郡西山派の本寺也寺伝に永禄三年庚申桶
狭間合戦の時神君大高村に御出陣ありしが織田勢のた免
に御危難あるべきよしを緒川の城主水野四郎左衛門申上しかバ
一旦常滑まで退かせない度にて里人を召し成岩の天竜山へ
案内すべき旨命じ玉ふこ連に依て山越に当寺へ成らせらる
その時の住持顕所上人御前に出て申したるハ此度能御帰
陣少勢なる故愚僧弟子之内聡本といふ者大力の勇者な
連バ彼に一山の大衆を引率させ山内の裸馬に打乗らせ三河へ
能御案内いた春へしと申上らバ神君の御喜悦斜なら須

尾張名所図会
成岩常楽寺の記事



さらは鞍を持た須辺しとて鞍鐙及び板鋏箱等をも賜ひしが
今も猶寺宝とす其後天正十七年堂前に二本の松を御手づか
ら植なひしを今も御手植の松と称して枝葉殊に繁茂せり往
昔ハ寺領ありしが秀吉公能時是を没収春又国祖君知多浦
に御遊猟の砌当寺に数日滞留しなひ寺領もとの如く賜ハりし
より今に歴然たり近き頃半田村能小栗某を者しめ総旦那打
寄数千の資材を寄附し堂内の荘厳を修理せしが七宝を
鋳め朱粉を施してその美美さながら九品の浄土に至連る想
ひをなせり
○本尊　三尊仏　塔頭超世院遺浄院真如院來迎院の四宇あり